

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500698

研究課題名(和文)身体表現による幼小連携カリキュラム構築に関する研究

研究課題名(英文) Study on creation of a coordinated preschool and elementary school curriculum based on dance education

研究代表者

高野 牧子(TAKANO, MAKIKO)

山梨県立大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：30290092

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：身体表現による幼小連携カリキュラム構築の基礎資料を得ることを目的に、日本、イギリス、キューバでインタビュー及び実態調査を行った。その結果特にイギリスでは、(1)小学校開始を低年齢化した「レセプションクラス」の遊び中心から徐々に学習へとつなぐ「なだらかな」接続、(2)接続期の人的支援体制、(3)信頼関係に基づいたダンス教育における専門家の活用の実態を明らかにした。このような幼児期から小学校への教育内容の連続性は、現在の日本では未着手であり、今後「幼小連携」のカリキュラム構築にむけて、貴重な資料となったと研究成果を評価する。

研究成果の概要(英文)：This study conducted interviews and it ascertained current conditions in Japan, the UK, and Cuba in order to obtain data creation of a coordinated preschool and elementary school curriculum based on dance education. Result from the UK in particular revealed that (1) children gradually develop a "fluid" transition to learning primary via play in a "reception" class at the earliest age children can start formal schooling, (2) a system of support is provided during the transition period, and (3) specialists in dance education are drawn upon during the transition based on the trust they have fostered. This continuity of the curriculum from preschool to elementary school has yet to be instituted in Japan. Result of this study are valuable data to facilitate creation of a coordinated preschool and elementary school curriculum.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 身体教育学

キーワード：幼小連携 身体表現 カリキュラム イギリス 実態調査 なだらかな接続 接続期の人的支援 専門家の活用

1. 研究開始当初の背景

平成 21 年度より新幼稚園教育要領が完全実施され、領域「表現」の内容では「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。」とし、「動きによる表現」が言葉や演じるより先に記載されている。言葉の発達が未熟な幼児期の特性を活かした内容として、「動きによる表現」の重要性は高い。平成 23 年度から完全実施された小学校新学習指導要領では、中学年以上が「表現運動」と示されているのに対し、小学校低学年では「表現リズム遊び」と提示され、「遊び」という視点を明示することによって、少なくとも名称においては幼児期から低学年期への教育の一貫性を重視していることが認められる。

しかし、実際には、幼稚園では運動会でのリズムダンスが中心であり、幼児ならではの生き生きと表現題材になりきって身体表現遊びを楽しむ活動は、その多様性においても深みにおいても検討の余地が大きい。また、小学校においても、「表現リズム遊び」の指導は、小学校学習指導要領解説において、「題材と動きの例示」が具体的に示されているものの、指導法の模索が続いている。「動きによる表現」は、言語発達の途上にある幼児期において、一人ひとりの内面を外在化する上で非常に有意義な活動であり、自分をどのように表現し、他者とコミュニケーションしていくか、人間の生涯にわたるコミュニケーション能力の基盤となる。従って、今後、「幼小連携」を考えていく上でこのような特性を有する「動きによる表現」は幼児期からのボトムアップの方向性による教育カリキュラムの構築に不可欠であろう。

これまでの先行研究では、「動きによる表現」の研究対象を幼児、または小学生と分けてとらえることが多く、「幼小連携」

の視点から、発達の連続性を前提として、カリキュラム、指導法、指導教材を総合的に体系化した研究は未だ、行われていない。

2. 研究の目的

「幼小連携」のカリキュラム構築に向け、特に「身体表現」教育に焦点を絞り、幼児教育における「身体表現あそび」から小学校体育における「表現リズム遊び」へと接続させる学習内容や指導法を明らかにすることを目的とする。「幼小連携」は、小1ブロblemなどでその必要性が問われるようになったが、その具体的な方法論がみえにくいことが指摘されている。そこで、日本の幼稚園での「身体表現あそび」と小学校低学年における「表現リズム遊び」の相違点を明らかにした上で、連続性のあるカリキュラムを進めている海外の CREATIVE MOVEMENT の実態を踏まえ、幼児期の「身体表現あそび」から小学校低学年「表現リズム遊び」へと接続する具体的な方法を検討し、「幼小連携」のカリキュラム構築にむけての基礎的資料とするものである。

3. 研究の方法

(1) 観察調査

日本及びロンドン、キューバにおいて、幼稚園での身体表現活動や小学校での表現運動の授業実践を観察し、可能な限り映像に記録し、観察記録と共に映像分析を行い、指導の展開と内容を明らかにしていく。

調査対象は日本国内 6 カ所、イギリス 3 カ所、キューバ 3 カ所、合計 12 カ所で実施した。下記に詳細を記す。

山梨大学附属幼稚園 2011.5.26.

川口市立舟戸幼稚園 (第 1 回目調査

2011.6.29./ 第 2 回目調査 2011.11.4)

山梨県三富小学校「表現遊び」2011.10.15

お茶の水女子大学附属小学校「表現運動」

2012.2.20.

千葉県南房総市 2013.9.2

福島県南相馬市・郡山市 2013.9.12~13

All Saint's Primary School in Blackheath

2012.9.13. (ロンドン)

Blackheath Montessori Center

2012.9.13. (ロンドン)

All Saints' C of E Primary School in Wimbledon, 2012.9.14. (ロンドン)

Day Care Center (キューバ)2013.4.10.

Primary School (キューバ) 2013.4.11.

National Program(キューバ) 2013.4.10.

(2)インタビュー調査

イギリス教育省 (Chris Barnham 他、EYFS のアセスメントの担当者であり、主に、5歳から K1 のナショナルカリキュラムへのアセスメントの専門家への調査)。2012 年 9 月 11 日実施

NFER(National Foundation for Educational Research) (幼児教育部門担当者 Caroline Sharp への調査) 2012 年 9 月 14 日実施

4. 研究成果

(1) 幼小連携の実態把握

山梨大学附属幼稚園における幼小連携活動「ザリガニつり」(2011.5.26.)では、年長児と小学校1年生と一緒にザリガニつりを行い、互いに協力してザリガニを発見し、うまく釣りあげる工夫を考え、協働する力を発揮していた。敷地も隣接し、連携が取りやすい環境であるが、教員間の連携は難しい面もあるということだった。

一方、川口市立舟戸幼稚園の第1回調査では、幼稚園児、小学生と一緒に通園、通学してくる様子や小学校1年生が幼稚園訪問し、招待状を園児へ渡す場面を観察し、第2回調査では「平成22・23年度川口市教育委員会委嘱学校間連携教育研究発表会」に参加し、幼・小・中連携の実態を把握した。緊密な連携を恒常的に実践し、信頼関係の中での実践は素晴らしい成果をあげていた。

「表現運動」の授業実践の把握

山梨県三富小学校は小規模校で、1年生7名、2年生10名と少人数での「表現遊び～動物ワールドで楽しもう!!」の授業実践について、観察調査した。三富小学校では幼児期から地域での結び付きも強く、異年齢でも仲良く、協力して表現することができていた。

一方、お茶の水女子大学附属小学校「表現運動」の授業実践では、小学校6年生を対象に「一瞬にかける」というテーマで実施した。授業内容は正に瞬時に消えていく表現芸術の核心に触れる素晴らしい内容であったが、幼小連携で表現活動を行った実績はない。

子どもの減少、保育ニーズの増大、震災による影響など必要性に迫られた幼保小連携と制度による壁(課題)

南房総市では、幼児・児童数の減少を踏まえて、0～15歳を見通した幼保小連携が構想されていた(2013.9.2)。また、南相馬市や郡山市の調査(2013.9.12～13)では、震災による子どもの減少や健康被害のために必然的に学校間の連携や幼保小の連携が求められている実態を確認できた。ただ、そうした必然性をもった幼保小連携への要望も文科省と厚労省の管轄の違いなど制度的な壁によって具現化が思うようにいっていないことがみえてきた。

(2)イギリスでの調査結果

カリキュラム

0歳児から5歳児、そして5歳児入学以降の各ステージにおいて、ダンス教育は明確にカリキュラムに位置づけられている。2004年調査した幼稚園、ダンススクールでの実態を検討し、その特徴を次のようにまとめた。

Early Years Foundation Stage(EYFS)では6領域が掲げられている中で、特にダンス教育は身体の発達と創造性の発達に深く関わり、他の領域とも関連すると考えられる。この中で、40～60か月での到達目標の中には「子どもの想像的なアイデアとつながった表現的な動きを促すことで、身体を通し

でのコミュニケーションを援助する」とあり、
ではダンスと音楽という項目があり、「絵画や写真、音楽やダンスで多様なアイデアや考え、感情を表現の仕方を理解するように発達を促す」とある。

これに対し、National Curriculum (NC) の5歳児のキーステージ1ではダンスは体育の領域に位置づけられている。

a. 想像的な動き、音楽を含めた刺激への反応、基礎的技能（例えば、移動する動きや形を作ってポーズ、ジャンプ、ターン、ジェスチャー）を演じる

b. 動きのリズムや速さ、高さや方向性を変える

c. 多様な時代や文化を含んだ、簡単な動きのパターンを使って、ダンスを創造し、演じる

d. 考えや感情を表現し、伝える

と、具体的になり、広がりや深まりが増す。

さらにキーステージ2（6歳児）では、次のように発展する。

a. 多様な時代や場所、文化を含んだ幅広い動きのパターンを使ってダンスを創造し、演じる

b. 幅広い刺激や伴奏への反応

以上のように、イギリスのダンス教育では、5歳までに多様な表現の土台を築き、5歳児で具体的にダンス表現の本質にふれるよう、活動内容が展開されている。生涯を見通したカリキュラムの構築が必要であると考える。

(2)イギリスでの「幼小連携」現状

インタビュー調査およびイギリスの保育園、小学校への訪問調査から示唆される点は主に以下の3点である。

小学校開始年齢の低年齢化としての「レセプションクラス」の位置づけ：レセプションクラスは遊び中心で、細かな時間の区切りもない。子どもたちは自分が選んだ遊びを自分がやりたい時間続ける事ができる。

「Year1」の「なだらかな」教育活動：Year1

では小グループによる文字の学習なども始まるが、基本的には遊び中心で、子どもに選択権がある。このような状況を続け、2週間を目途に徐々に学習の部分を増やしていく。子ども主体の遊び中心から学習へとつなぎ、「なだらかな」接続が図られていた。

人的条件など支援体制の充実：担任だけではなく、コミュニケーションスタッフや補助教員、幼稚園から加配されたラーニングメンターが子どものことを熟知した専属スタッフとして配属され、大きな環境の変化によって子どもが傷つかないように特別に配慮されていた。

(3)イギリスにおけるダンス教育

ロンドンのナーサリー及び小学校でのダンス教育の実践事例を分析し、幼児から小学校までの指導内容の展開をまとめ、その特徴から系統性のある身体表現の指導法を検討した。なお、調査対象とした実践はいずれも外部のダンス指導者が指導している事例である。

ロンドンでの事例調査から示唆される点は主に以下の4点である。

指導内容については他領域と連携する。

保育所、学校側がカリキュラムを基に外部の指導者へ指導内容を提示し、それに基づき、ダンスの指導展開はダンス指導者が立案し、授業を実践する。

テーマに沿って活動内容はウォーミングアップから発表まで一貫性がある。

ダンス指導者がテーマに添った動きを子どもたちに真似させ、その動きの中から子どもたちが即興的に組み合わせる自由な踊ることを、幼児期から小学校まで繰り返し実践し、系統性が認められた。

イギリスのダンス教育では芸術家が学校と協働し、教育内容の連携と信頼関係の上で、子どもの創造性を高める質の高いダンス教育が展開されていた。専門家と連携することでカリキュラムアーティキュレーションが保

たれている現状は、日本における学校支援ボランティアなどの活用のあり方に示唆を与えるものである。

(4)キューバでの調査結果

2013年4月8日～4月14日キューバで開催された第17回国際女子体育連盟会議(IAPESGW)に参加および研究発表し、世界各国の女性のダンス・スポーツの指導者、研究者と互いの研究情報を交換し、「幼小連携」について新たな知見を得た。さらに、キューバ国営の健康プログラムやデイケアセンター(2歳児から5歳児の保育施設)、小学校を視察し、一斉指導号令型の体育授業を幼児から小学校まで一貫して行っているキューバの実情を理解した。キューバの民俗舞踊については決まった踊りの型がある中で自由にリズムに乗って表現する指導が行われている一方、体育指導では、幼児から小学校まで教師の指示通りに動く一斉指導が展開されていた。

(5)研究全体のまとめ

本研究全体として、イギリスにおける小学校開始を低年齢化した「レセプションクラス」の遊び中心から徐々に学習へとつなぐ「なだらかな」接続、接続期の人的支援体制、ダンス教育における専門家の活用の実態を明らかにすることができた。このような幼児期から小学校への教育内容の連続性は、現在の日本では未着手であり、今後「幼小連携」のカリキュラム構築にむけて、貴重な資料となったと研究成果を評価する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

高野牧子、堀井啓幸、イギリスにおける幼小連携の現状と課題(その2) - 事例調査から -、山梨県立大学人間福祉学部紀要、査読有、第9号、2014、pp.27 - 36

高野牧子、堀井啓幸、イギリスにおける幼小連携の現状と課題(その1) - ロンドンにおける事例調査から -、山梨県立大学人間福

祉学部紀要、査読有、第8号、2013、pp.37 - 48

堀井啓幸、実践報告：幼小連携(接続)についての実践研究報告、査読無、教育と時間研究会編『ジャーナル教育と時間』、第17号、2013、pp.64 - 75

高野牧子、ロンドンでの Creative Partnership によるダンス教育の現状、査読無、舞踊学、第36号、2013、p.81

堀井啓幸(共著)構造改革と質の向上を考える-幼保一体化の新たな制度を切り口にして-(解題:シンポジウムの企画趣旨と報告)、日本教育制度学会『教育制度学研究』、査読有、第18号、2011、pp.6 - 10

〔学会発表〕(計 4件)

堀井啓幸、2013 現代的学校教育課題解決シリーズ: コミュニティ・スクールの現状と課題 - 学校と家庭・地域の編み直し -、2013年5月18日、群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

高野牧子、A practical study of the effectiveness of creative movement in early childhood - Based on Laban's theories -、IAPESW 17' th World Congress, Cuba, 2013.4.10. Havana convention center,

高野牧子、幼小連携における活動内容 - イギリスでのダンス教育に焦点を絞って -、日本保育学会、平成24年5月4日、東京家政大学

高野牧子、ロンドンでの Creative Partnership によるダンス教育の現状、舞踊学会、平成24年12月1日、東京大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

高野 牧子 (TAKANO, Makiko)

山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科・教授

研究者番号: 30290092

(2)研究分担者

堀井 啓幸 (HORII, Hiroyuki)

山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科・
教授

研究者番号：30190234